

チョムスキーとヴィルヘルム・フォン・フンボルト —言語思想と政治思想—

中 井 悟

1 はじめに

1.1 本稿の目的

生成文法はデカルト以来の合理主義 (rationalism) の言語学であるというのがチョムスキー (Noam Chomsky) の主張である。チョムスキーの著作の一つに *Cartesian Linguistics* (『デカルト派言語学』) という本があり、その中でチョムスキーは生成文法がデカルト流の合理主義の流れを汲む言語学であることを説明している。*Cartesian Linguistics* (『デカルト派言語学』) という題名からしてデカルトに言及している部分が多いのは当然であるが、この本でもう一人チョムスキーが言及している人物がいる。ヴィルヘルム・フォン・フンボルト (Wilhelm von Humboldt) である。¹ チョムスキーは、生成文法と同じことをすでにフンボルトが言っており、生成文法の基本的な考え方はフンボルトにまで遡れると主張している。

本稿の目的は、チョムスキーとフンボルトの言語思想と政治思想を比較・検討することである。そして、その比較から、チョムスキーが言語学者でありながら政治活動をする理由を探っていくのもう一つの目的である。

まず、生成文法とフンボルトの言語思想の類似点はどこにあるのか (あるいは、ないのか)、そして、チョムスキーのフンボルト解釈は正しいのか (チョムスキーはフンボルトを誤解しているという議論がある) という点を中心に、まず、言語思想の観点から論じていく。

次に、政治思想の観点からチョムスキーとフンボルトの関係を論じる。チョ

ムスキーは、デカルトを主に合理主義の伝統との関連で論じているのであるが、フンボルトに関しては言語思想と政治思想の両面から論じており、チョムスキーがフンボルトを引き合いに出す理由を考える時には、チョムスキーとフンボルトの政治思想を比較する必要がある。

本稿は、生成文法について基礎知識（深層構造(deep structure)、表層構造(surface structure)、変形(transformation)、普遍文法(Universal Grammar)、言語獲得装置(Language Acquisition Device)など)を持っている人を対象にしている。したがって、本稿では、生成文法の解説はしないが、チョムスキーがフンボルトに言及しているのは主に1960年代であるので、Chomsky (1965)で展開されている標準理論(Standard Theory)を理解していれば十分である。

筆者も含めてそうであるが、生成文法を研究している人は、チョムスキーが言っていることをそのまま信じている場合が多い。しかし、時には、立ち止まって、チョムスキーが言っていることは本当だろうかと疑ってみることも必要である（と筆者は思っており、チョムスキーの主張を点検してみるいくつかの試みもしてきた²⁾）。本稿もチョムスキーの主張が本当に正しいのかを検討してみる試みの一つである。

1.2 フンボルト

最初にフンボルトについて簡単に紹介しておく。亀山(1978)の書名の『フンボルト—文人・政治家・言語学者』が示すように、フンボルトは言語研究のみならず、政治、教育、文学など多方面で活躍した人である。亀山(1978)によれば、フンボルトは1776年6月22日ベルリン西郊のポツダム生まれである。政治家としては、「会議は踊る」で有名な1814年のウィーン会議にプロイセンの次席代表として参加しているし、教育者としてはベルリン大学の創設に関わっている。シラーやゲーテとも親交があり、ゲーテはフンボルトに大きな影響を与えたと言われている。言語学者では比較言語学者として有名なフランツ・ボップとも親交があった。

2 フンボルトの言語思想

チョムスキーとフンボルトの言語思想を比較するためには、まず、両者の言語思想がどのようなものであるかを明確にしておく必要がある。ただし、チョムスキーの言語思想は本稿の読者はすでに知っているという前提であるので、フンボルトの言語思想を紹介し、それをチョムスキーがどのように解釈しているかを見てみよう。

フンボルトの言語思想を明確にするのはなかなか難しいようである。フンボルトの言語研究は、彼の講演、知人への手紙、論文などに散らばっており、また、断片的なものが多い。フンボルトの言語思想がもっともよくまとまって述べられていると言われるのが、『人間の言語構造の相違性と、人類の精神的展開に及ぼすその影響について』という本で、元々は、フンボルトの遺稿の『ジャワ島におけるカヴィ語について』の序説である。これは、亀山訳のHumboldt (1984, pp. iii-iv)によれば、フンボルトの弟であるアレキサンダー・フォン・フンボルトの監督のもとに、フンボルトの弟子のブッシュマン(J. K. Buschmann)が遺稿を整理し、『人間の言語構造の相違性と、人類の精神的展開に及ぼすその影響について』という標題を付して、1836年3月に一冊の本として刊行したものとのことである。³

Humboldt (1836)にはフンボルトの言語思想がまとまって述べられているとは言っても、実は具体的には述べられておらず、曖昧で漠然としており、理解するのが困難である。

フンボルトの言語思想の中心概念は、「言語はエルゴン(ergon)ではなく、エネルゲイア(energeia)である」、「言語は精神活動である」、「言語は有機体である」という三つの文で述べることができる。そして、チョムスキーのフンボルト解釈で問題になるのが「言語の形式(form of language)」という用語の意味である。関係するフンボルトの記述を以下に抜き出してみた。⁴

- (i) 言語とは内面的な存在の器官である。そしてこの内面的な存在そのものは、次第次第に内面的な認識に到達すると同時に表出として現れてくるものなのである。(p. 19)
- (ii) 内面的な連関を備えた有機体としての言語 (p. 20)
- (iii) 言語そのものが有機構造を持っている。(p. 20)
- (iv) 言語を作り出すということは、人類の内面的な必然的欲求であって、単に社会的な交流を保つためには必要だという程度の外面的な要求にはとどまらず、人類の本性そのものに根差した欲求であり、人類の持つさまざまな精神的な力を展開させ、世界観を獲得するには不可欠なものである。(p. 29)
- (v) 言語そのものは、出来上った作品(エルゴン)ではなくて、活動性(エネルギー)である。それ故、言語の本当の定義は、生成に即した定義しかあり得ないことになる。すなわち、言語とは、分節音声を思考の表現たり得るものとするための、永劫に反復される精神の働きなのである。(p. 73)
- (vi) 精神は分節化した音声を思考の表現にまで高めてゆく役割を果すわけであるが、精神のこういう仕事の中にみられる恒常的なもの、同じような形態を取り続けているものを、できるだけ完全にその関連性において把握し、できるだけ体系的に表現したもの、それが言語の形式ということになる。(p. 75)
- (vii) 言語とは、思考を形成してゆく器官である。人間の知的活動は、徹頭徹尾、精神的なものであり、かつ全く内面的なものであって、いわば跡形もなく消えてしまう一過的な性質を持っているが、それを口に出して語ることによって、音声を媒介として外面化され、感覚・感官に取って知覚し得るものとなる。それ故、知的活動と言語とはもともと一体なのであり、相互に切り離すことのできないものである。(p. 85)

(viii) 言語の働きは、単に個々の〔言語的な〕現象の成立してくる原因となる働きだけに留まるものではない。言語の働きはそれと同時に、思考によって言語に与えられる数々の制約のもとで、無際限に多くの個々の言語的現象を作り出す可能性を開いてゆくものでなくてはならない。というのは、言語は、思惟し得るものすべてを総括した全体、という無限で、しかも、正に広大きまわる領域に直面しているからである。それ故、言語は、限られた手段を使いこなして、無限の用法を作り出さなくてはならないことになるが、言語はそれをやってのけるのである。それというのも、思考を生み出す力と、言語を生み出す力が同一だからである。(p. 157)

このように、フンボルトは、「内面的な連関を備えた有機体としての言語(ii)」、「言語そのものが有機構造を持っている(iii)」、「言語そのものは、出来上った作品(エルゴン)ではなくて、活動性(エネルゲイア)である(v)」と言っているのであるが、具体的に説明はしていない。Humboldt (1836)は序説といってもかなり長いものであるが(亀山の日本語訳で、弟のアレキサンダー・フォン・フンボルトの序文を含めて530ページある)、全部を読み通しても、フンボルトの言っていることが曖昧で具体的に何を言っているのかよく分からないのである。

しかし、フンボルトの言っていることを生成文法流に解釈することは可能であり、実際、チョムスキーはそうしているのである。

(i)と(ii)と(iii)では言語が有機体としての器官であると述べられているが、生成文法では、心臓や肺などと同じように言語(規則の体系としての文法)を心的器官(mental organ)と見なしている。Chomsky (1980)では次のように説明されている。

In the case of the study of language, the question is complicated in practice by the obvious fact that the system of language is only one of a number of cognitive systems that interact in the most intimate way in the actual use of language. . . . Continuing to think of the system of grammatical rules as a kind of “mental organ,” interacting with other mental organs with other functions and properties, we face a rather typical problem of natural science, namely, the problem of appropriate idealization and abstraction. (p. 188)

しかし、チョムスキーは、言語は有機体ではないと断言している。Chomsky (2015)は次のように述べている。

言語は進化しません。言語は変化しますが、進化はしません。言語と
いうのは有機体ではありませんし、DNAも持っていません。従って、
言語は進化などしないのです。進化するのは言語のための能力、つまり
普遍文法です。(p. 40)

(iv)で述べられていることは、言語はコミュニケーションのために作られたのではないというチョムスキーの考えと同じである。Chomsky (1991)は、言語はコミュニケーションの手段ではあるが、それは言語の本来の目的ではないと述べている。チョムスキーの考えでは、言語は、思考し、その思考を表現するための手段である。

This faculty [language faculty], furthermore, is internally highly modularized, with separate subsystems of principles governing sound, meaning, structure and interpretation of linguistic expressions. These can be used, to a sufficient degree, in thought and its expression, and in specific language functions such as communication; language is not intrinsically a

system of communication, nor is it the only system used for communication.

(p. 51)

(v)と(vi)の解釈も難しい。(v)の下線部の「言語そのものは、出来上った作品(エルゴン)ではなくて、活動性(エネルギー)である。それ故、言語の本当の定義は、生成に即した定義しかあり得ないことになる」は、生成文法の深層構造から表層構造への派生(generative process)のことを意味していると言えるのか、あるいは、(vi)の「言語の形式」(英語ではform of languageである)、すなわち、「精神のこういう仕事の中にみられる恒常的なもの、同じような形態を取り続けているものを、できるだけ完全にその関連性において把握し、できるだけ体系的に表現したもの」を生成文法の言語能力(competence)、すなわち、内在化された言語知識(internalized knowledge of language)と解釈していいのか、あるいは、普遍文法と解釈してよいか、など曖昧である。

(v)で、「言語とは、分節音声を思考の表現たり得るものとするための、永劫に反復される精神の働きなのである」と述べられているが、この部分は、英訳本であるHumboldt (1999)では、it [language]is the ever-repeated *mental labour* of making the *articulated* sound capable of expressing *thought* (p. 49) と表現されている。この英語訳は、まさに、脳に内在化された文法を使って文を生成し、その文を発話することによって思考を表現するという生成文法の考え方と同じことを言っているように見える。この言語は精神の働きであるという見解は、生成文法で文法がmind (チョムスキーがよくmind/brainという表記をするように、ここでいうmindはbrainの働きのことである)の中にあるという主張と通じるものがある。生成文法でいう普遍文法は、mindの初期状態 (genetically determined initial state of the mind (Chomsky 1980, p. 187))であり、文法はmindの中で成長する (grammar grows in the mind (Chomsky 1980, p. 134))のである。成長した結果が個別言語の文法である。しかし、フンボルトがこ

ここで言語は精神の働きであると言っていることは、単に生成文法でいう文の生成のことだけではないであろう。人類が言語を持つようになった過程も含めたもっと広い精神活動のことを念頭においていたはずである。

(vii)で述べられていることは、チョムスキーが文法はsoundとmeaningを結びつけるものであると言っていることと通じる。

(viii)の下線部の「言語は、限られた手段を使いこなして、無限の用法を作り出さなくてはならないことになるが、言語はそれをやってのけるのである」は、生成文法でいう言語の創造的側面(creative aspect of language use)のことと解釈してよいであろう。チョムスキーが使うinfinite use of finite meansという表現はこのフンボルトの表現を借りたものである。

次に、子供の言語習得についてのフンボルトの記述を見てみよう。⁵

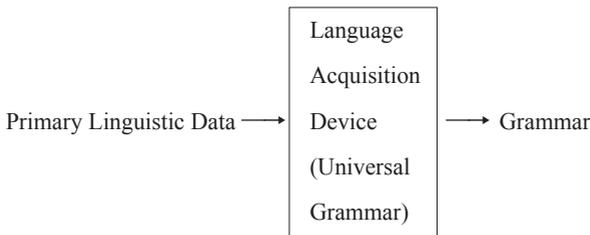
- (ix) 子供の言語学習というものも、語を割りあて、それを記憶の中に定着させ、更に唇を使ってその響きを再現させることではなく、年を閲し、訓練を重ねるにつれ、言語能力が成長してゆくことなのである。(p. 91)
- (x) 小児を見ていると、言語は機械的に学び取るものではなく、子供たちの言語能力が内から展開してくるものであるという事実に気づくのであるが、このことは、一体何を実証しているのであろうか。それは、状況がそれぞれ個々に極端に異なっているとはいえ、子供たちは、例外なしに、ほぼ同一の狭い時間帯に属する年齢に達すると、一斉に語り始め、他人の言うことを一斉に理解し始めるようになるものであるが、その理由は、人間の主要な能力が展開するようになる時期は、人生の中でも特定の年齢という時点が決まっているからに他ならない。しかしながら、他人が語るのを聞く場合、聞く人の内部だけに孤立して展開してくるその人独自の能力さえ持っていれば、果してそれだ

けで、耳にしたものを真に己れのものとするのであろうか。それが可能であるためには、語り手の内にも、聞き手の内にも、全く同一の人間の本質が潜んでおり、ただ、その同じ本質が、それぞれ個性的な形を取り、相互に相応しつつ分離しているにすぎないということが、なくてはならないのではあるまいか。そう言ってよければ、分節音声というような繊細な信号—これは、人間の本質の最も深く、最も本来的な性質から汲み取られて得られたものに他ならない—があれば、それが語り手と聞き手の両者をうまく調和させて、みずから媒介の役割を果しつつ、その両者の心を動かし駆り立てることができるのではあるまいか。(p. 92)

- (xi) ここに扱っているような事象は、人間は何処へ行っても、人間同士一体であり、従って、言語能力の展開は、個々の現実の個人の自ら助くるところによっておのずから行なわれる、という事実からだけでも、十分に説明がつくのである。それ故、言語能力の展開は、社会的交渉の影響を受けるのは当然ではあるが、それに劣らず、己れ自身の内部から生じてくるものである。ただ、言語能力が展開してくるためには、どんなときでも常に外面的刺激を欠くわけにはゆかないので、経験した外面的なものに類似した形を見せるだけのことであって、それができるのも、人間の持つ言語には、すべてのものに共通の一致するところがあるからである。(p. 93)

子供の言語習得についてのフンボルトの考え方は、primary linguistic dataを入力として言語獲得装置が個別言語を作り出すという生成文法の考え方とほとんど同じであり、チョムスキーがフンボルトの考え方をそのまま借りたのではないかと思わせるほどである。

生成文法の言語習得の考え方は次の図で示される。Primary Linguistic Data は子供が聞く周囲の人たちの発話 ((xi)にあるフンボルトの「外面的刺激」) であり、それがデータとして、普遍文法(Universal Grammar)をその中に含む言語獲得装置(Language Acquisition Device)への入力となり、個々の言語の文法がその言語獲得装置からの出力である。



(ix)の下線部の「子供の言語学習というものも・・・言語能力が成長してゆくことなのである」というフンボルトの見解は、先ほど述べた「文法はmindの中で成長する (grammar grows in the mind (Chomsky 1980, p. 134))」というチョムスキーの見解と呼応するものである。

(x)の引用中の最初の下線部の「状況がそれぞれ個々に極端に異なっているとはいえ、子供たちは、例外なしに、ほぼ同一の狭い時間帯に属する年齢に達すると、一斉に語り始め、他人の言うことを一斉に理解し始めるようになるものであるが、その理由は、人間の主要な能力が展開するようになる時期は、人生の中でも特定の年齢という時点が決っているからに他ならない」というフンボルトの見解は、現代の心理言語学で「臨界期 (Critical Period)」と呼ばれている概念と同じである。現代の心理言語学でも、人間は臨界期を過ぎると言語を習得することができないとされている。思春期を過ぎると外国語を習得するのに苦労するのである。

フンボルトが生成文法の普遍文法と同じようなことを考えていたことは、(xi)にある、フンボルトの「人間の持つ言語」にある「すべてのものに共通の一致するところ」から解釈できるが、下記の記述からもそのことは窺える。

- (xii) 言語に向うという生れながらの素質は、人間の普遍的な素質であり、従って、万人があらゆる言語を理解する鍵を自己の内に蔵していることになるのであるから、すべての言語の形式は基本的には相互に似通うのが当然であり、しかも、この形式は普遍的な目的に到達すべきはずのものである。言語に相違があるとはいっても、それはせいぜい手段の問題に過ぎず、目的達成のために許される範囲内に限られてしまうことになる。

(pp. 387-388)

しかし、フンボルトは「すべての言語の形式は基本的には相互に似通う」と言っているのであるが、これを生成文法流に解釈する場合に、フンボルトの「言語の形式」(form of language)は、個々の言語を創り出す基になる生得的な普遍文法のことを言っているのか、あるいは普遍文法に基づいて獲得された言語能力、すなわち、内在化された言語知識と解釈してよいのか曖昧である。生成文法流に言えば、すべての言語の表層構造はお互いに異なるが、深層構造のレベルまで下がるとお互いに似ているということになるのであるか。

注意しなければならないのは、フンボルトの「言語の形式 (form of language)」の概念が曖昧であるといっても、それは、生成文法の観点からすれば曖昧であるというだけのことである。フンボルトは生成文法でいうところの普遍文法と言語能力を区別などしていなかったのである。筆者の印象では、フンボルトは言語を創造する何か根源的な有機体のようなものを考えていたと思われる。歴史的・発生論的観点からは、この根源的な有機体のよう

なものが人間の言語を創り出したのであり(人間の言語の起源の問題),また,共時的な観点からは,この根源的な有機体のようなものが個々の言語行為(文の生成),すなわち,生成文法でいうところの言語運用(performance)を創り出すのであると言えるのではないであろうか。この根源的な有機体が人間言語の発生にも,子供の言語習得にも,そして生成文法で扱う文の生成にも関係しているということになるのではないであろうか。

以上がフンボルトが自分の言語思想を述べた部分を抜き出し,生成文法流に解釈したものであるが,フンボルトの言語思想を説明する際に必ず言及される,「言語はエルゴン(ergon)ではなく,エネルゲイア(energeia)である」,「言語は精神活動である」,「言語は有機体である」というフンボルトの言語思想の中心概念,そして「言語の形式(form of language)」が具体的に何のことを言っているのかよくわからないのである。実は,Chomsky(1966)も,下記の引用の最初の下線部で述べられているように,フンボルトの言語思想が明確でないことは理解しているのである。

For all his concern with the creative aspect of language use and with form as generative process, Humboldt does not go on to face the substantive question: what is the precise character of “organic form” in language. He does not, so far as I can see, attempt to construct particular generative grammars or to determine the general character of any such system, the universal schema to which any particular grammar conforms. In this respect, his work in general linguistics does not reach the levels achieved by some of his predecessors, as we shall see directly. His work is also marred by unclarity regarding several fundamental questions, in particular, regarding the distinction between the rule-governed creativity which constitutes the normal use of language and which does not modify the form of the language at all and the kind of innovation that leads to a modification in the

grammatical structure of the language. These defects have been recognized and, to some extent, overcome in more recent work. Furthermore, in his discussion of generative processes in language it is often unclear whether what he has in mind is underlying competence or performance—Aristotle’s first or second grade of actuality of form (*De Anima*, book II, chap. 1). This classical distinction has been reemphasized in modern work. . . . The concept of generative grammar, in the modern sense, is a development of the Humboldtian notion of “form of language” only if the latter is understood as form in the sense of “possession of knowledge” rather than “actual exercise of knowledge,” in Aristotelian terms. (pp. 27-28)

最後の下線部を読むと、チョムスキーのフンボルト解釈の重要な点がかかる。チョムスキーは、フンボルトのform of languageの概念は曖昧であることを理解した上で、フンボルトのform of languageの概念を自分流に解釈して、生成文法とフンボルトを結びつけようとしていることがわかる。⁶ この点は、第3節で論じる。

筆者自身も、Humboldt (1836)の日本語訳であるHumboldt (1984)とフンボルトの言語思想を解説した本を何冊か読んでみたが、「言語はエルゴン(ergon)ではなく、エネルゲイア(energeia)である」、「言語は精神活動である」、「言語は有機体である」というフンボルトの言語思想が具体的に何を意味するのかはわからないままである。⁷

3 チョムスキーのフンボルト解釈

第2節でも紹介したように、チョムスキーは、フンボルトの言語思想は曖昧で漠然としたものであることは理解した上で、自分のフンボルト解釈に基づいて、生成文法がフンボルトまで遡れると主張している。チョムスキーが自分の著作でどのようにフンボルトに言及しているかを見てみよう。

チョムスキーのフンボルトへの言及は1960年代に出版されたChomsky (1964)とChomsky (1966)に多くあるのであるが、それまでの研究をまとめ、標準理論 (Standard Theory) と呼ばれる生成文法理論の枠組みを提示しているチョムスキーの重要な著作であるChomsky (1965)にもフンボルトへの言及があるので、年代的には順序が逆になるが、まず、Chomsky (1965)から見てみよう。この本で、チョムスキーは、生成文法概念と同じものがフンボルトに見られると主張している。

3.1 Chomsky, N. (1965). *Aspects of the theory of syntax*. Cambridge, Mass.: The MIT Press.

チョムスキーは、心的実在 (mental reality) である言語能力は、ソシユールの項目の体系的な目録としてのlangueではなく、フンボルトの生成過程 (generative processes)のシステムとしてのunderlying competenceの概念に通じるものであると述べている。

Hence, in the technical sense, linguistic theory is mentalistic, since it is concerned with discovering a mental reality underlying actual behavior. Observed use of language or hypothesized dispositions to respond, habits, and so on, may provide evidence as to the nature of this mental reality, but surely cannot constitute the actual subject matter of linguistics, if this is to be a serious discipline. The distinction I am noting here is related to the *langue-parole* distinction of Saussure; but it is necessary to reject his concept of *langue* as merely a systematic inventory of items and to return rather to the Humboldtian conception of underlying competence as a system of generative processes. (p. 4)

第2節でも述べたが、生成文法でよく主張されるinfinite use of finite meansと

いう表現もチョムスキーがフンボルトから借りたものである。第2節で引用した「言語は、限られた手段を使いこなして、無限の用法を作り出さなくてはならないことになるが、言語はそれをやっつけてのけるのである」というフンボルトの表現が元である。チョムスキーはそのことを明言している。

In fact, a real understanding of how a language can (in Humboldt's words) "make infinite use of finite means" has developed only within the last thirty years, in the course of studies in the foundations of mathematics. (p. 8)

第2節のフンボルトの言語思想の説明では、form of languageは生成文法の普遍文法に相当するののか、あるいは、言語能力に相当するののか曖昧であると言ったが、次の引用では、心 (mind) に生得的に存在するform of language (schema for its grammarと言い換えられている) が経験を通して(周囲で言語が話されている環境に置かれると) 個別言語と変わっていくと説明されている。これは、生得的な普遍文法が周囲で言語が話されている環境に置かれると個別言語へと変わっていくという生成文法の考え方の説明である。この文脈では、チョムスキーは、form of language, すなわち、schema for grammarは生成文法の生得的な(以下の引用文中では、to a large extent givenと説明されている) 普遍文法に等しいと解釈している。

Applying this rationalist view to the special case of language learning, Humboldt (1836) concludes that one cannot really teach language but can only present the conditions under which it will develop spontaneously in the mind in its own way. Thus the form of a language, the schema for its grammar, is to a large extent given, though it will not be available for use without appropriate experience to set the language-forming processes into operation. Like Leibniz, he reiterates the Platonistic view that, for

the individual, learning is largely a matter of *Wiedererzeugung*, that is, of drawing out what is innate in the mind. (p. 51)

チョムスキーは、生成文法のdeep structureとsurface structureという考え方もフンボルトのinner formとouter formという考え方と非常に近いと述べている。

In place of the terms “deep structure” and “surface structure,” one might use the corresponding Humboldtian notions “inner form” of a sentence and “outer form” of a sentence. However, though it seems to me that “deep structure” and “surface structure,” in the sense in which these terms will be used here, do correspond quite closely to Humboldtian “inner form” and “outer form,” respectively (as used of a sentence), I have adopted the more neutral terminology to avoid the question, here, of textual interpretation.
(pp. 198-199)

このように、チョムスキーは、彼の重要な著作の中で、生成文法の考え方はフンボルトのものと同じであると宣言しているのである。

3.2 Chomsky, N. (1964). *Current issues in linguistic theory*. The Hague: Mouton.

チョムスキーがフンボルトに言及しているのは、主にChomsky (1964)とChomsky (1966)である。まず、Chomsky (1964)から見ていこう。⁸

チョムスキーは、まず、言語は産出活動であるというフンボルトの言語思想を紹介した上で、個々の言語の本質はgenerative processであるform（形式）であり、これは言語行為の基底にあるものであり、人間は、formの内的表象を持っているから言語を理解したり使用できるのであると説明している。⁹

On the one hand, we have the Humboldtian view that “man muss die *Sprache* nicht sowohl wie ein todtes *Erzeugtes*, sondern weit mehr wie eine *Erzeugung* ansehen” (1836, § 8, p. LV). The essence of each language is what Humboldt designates as its characteristic *Form* (not to be identified solely with “inner form”). The form of language is that constant and unvarying factor that underlies and gives life and significance to each particular new linguistic act. It is by having developed an internal representation of this form that each individual is capable of understanding the language and using it in a way that is intelligible to his fellow speakers. This characteristic form determines and inheres in each separate linguistic element. The role and significance of each individual element can be determined only by considering it in relation to underlying form, that is, in relation to the fixed generative rules that determine the manner of its formation. It is this underlying generative principle that the linguist must seek to represent in a descriptive grammar. The notion of “form” as “generative process” underlies Humboldt’s entire account of the nature of language and of the use and acquisition of language, and constitutes perhaps his most original and fruitful contribution to linguistic theory. (p. 17)

冒頭のドイツ語の部分は、「言語は、死せる産物のようなものではなく、それよりはるかに産出活動とみなさなければならない」という意味である。

最初の下線部で述べられていることは、人間は脳に内在化した言語知識、すなわち、言語能力を使って文を作り出したり、理解したりするという生成文法の考え方を述べているのに等しい。この文脈では、フンボルトの *form of language* は生成文法の言語能力ということになる。

しかし、最後の下線部は曖昧である。The notion of “form” as “generative

process” underlies Humboldt’s entire account of the nature of language and of the use . . . of languageの「. . .」で省略した部分以外に注目すれば、言語使用の基底にあるgenerative processのことを言っているのであるから、form of languageは言語能力と解釈すべきである。また、The notion of “form” as “generative process” underlies Humboldt’s entire account of . . . the acquisition of languageの「. . .」で省略した部分以外に注目すれば、このform as generative processという概念がフンボルトの言語習得の説明の基になっていることになり、この場合のform of languageは言語習得の基になる普遍文法と解釈しなければならなくなる。

3.1節で説明したように、Chomsky (1965)では、the form of a languageはthe schema for its grammarと言い換えられ、これが適当な経験を与えられると使用できるようになると述べられていたから、Chomsky (1965)ではthe form of languageは生成文法の普遍文法に等しいものと解釈されている。

以下の引用でも、form of languageがcommon human possessionであり、underlying general form of all languageと述べられている。つまり、チョムスキーは、フンボルトのform of languageを普遍文法と解釈している。

A generative grammar, in the sense sketched above, is an attempt to represent, in a precise manner, certain aspects of the *Form* of language, and a particular theory of generative grammar is an attempt to specify those aspects of form that are a common human possession—in Humboldtian terms, one might identify this latter with the underlying general form of all language
(pp. 19-20)

この見解の根拠としてチョムスキーが引用しているHumboldt (1836)からの引用がlanguage以下「. . . .」で省略した部分に書かれている。それが以下である。

多数の言語の諸形式は、もっと普遍的な形式において一緒になる、そして最も普遍的なものを出発点にとるかぎり、すべての形式は実際にそうなる。(中略) 人間はだれしも、或る特殊な言語を所有しているというのが正しいのと同じように、人類は全体としてただ一つの言語を所有しているのだというのも正しいのである。(§ 8, LXIII)

この文章を生成文法流に解釈すると、個々の言語は表層構造を見れば、異なった形式をしているが、深層構造のレベルまで下がれば、互いに似たような形式をしているのであるとなる。すべての人間が生得的に所有している普遍文法から個別言語が派生されるのであるから、すべての言語が類似しているのは当然である。よくチョムスキーは、人間の諸言語はお互いに異なっているように見えるが、火星から見れば一つの言語であると言うが、上のフンボルトの記述はまさにそのことを言っている。

このように、フンボルトの「言語の形式(form of language)」を、チョムスキーは生成文法の普遍文法と解釈している場合と言語能力と解釈している場合の二つがある。

form of languageの二通りの解釈は他のところでも見られる。以下の文章では、チョムスキーは、言語の理解と習得は同じ基底の能力、同じ生成の原理の異なった現れにすぎないという意見をフンボルトが持っていると言っている。

From this conception of the nature of language, Humboldt derives his views concerning understanding of speech and acquisition of language. Speaking and understanding are, in his view, differing manifestations of the same underlying capacity, the same generative principle, mastery of which provides the speaker-hearer with the ability to use and understand all of the

infinite range of linguistic items . . . (pp. 18-19)

items以下「. . . .」で省略した部分には、チョムスキーがこの判断の根拠として引用しているHumboldt (1836)からの引用が書かれているのであるが、その箇所は次の部分である。

理解するということについても、事情はまったく変わらない。魂のうちには、自分自身の活動によるもの以外は何も存在しえず、理解することと語ることは、同一の言語能力の異なった仕方の作用結果にすぎない。共通の発言は或る素材を無視することとけっして比較されえない。語る者においても、理解する者においても、同一のことが自分自身の内面的力から展開されねばならない。理解する者が受け取るとは、調和的に適合している刺激にすぎない。したがって、今理解したことをもう一度すぐに口にするには、人間には自然なことなのである。このように、言語はどんな人間においても、その全きひろがりのうちにあるが、このことが意味しているのは、どんな人間も或る制御された能力を所有しているということ、すなわち、内的あるいは外的誘因に導かれながら、言語の全体を徐々に自分から生み出そうとし、生み出されるのを理解しようとする能力を所有しているということにほかならない。(§ 9, p. LXX)

子供が言語を習得することは、語に意味を認めることでもないし、語を記憶の中に書き留め、それをもう一度唇に出すことでもない。言語の習得とは、年長者や練習を介して言語能力を育成することである。(§ 9, p. LXXI)

[言語は] (中略) 一見するとそう見えないにせよ、本来は習得されう

るものではなく、心意のうちに呼び起こされうるものにすぎない。人は、言語がおのずと展開される際の道筋を言語に委ねることしかできない。(§ 6, p. L)

習得とは、つねに再産出でしかない。(§ 13, CXXVI)

「理解することと語ることは、同一の言語能力の異なった仕方の作用結果にすぎない」や「語る者においても、理解する者においても、同一のことが自分自身の内面的力から展開されねばならない」という記述は生成文法流に表現すると、言語を理解する者も言語を産出する者も同一の言語能力を持っているということになる。しかし、「どんな人間も或る制御された能力を所有しているということ、すなわち、内的あるいは外的誘因に導かれながら、言語の全体を徐々に自分から生み出そうとし、生み出されるのを理解しようとする能力を所有している」というフンボルトの記述にある「能力」は、生成文法流に言うところの普遍文法である。

「言語の習得とは、年長者や練習を介して言語能力を育成することである」というフンボルトの記述は、生成文法流に言うところの、言語習得とは普遍文法に基づいて言語能力を獲得するということである。

「[[言語は] (中略) 一見するとそう見えないにせよ、本来は習得されうるものではなく、心意のうちに呼び起こされうるものにすぎない」というフンボルトの記述は、生成文法流に言うところの、人間は生得的な普遍文法を持っているのであり、この普遍文法が個別言語へと変わっていくということである。

上の引用文中の、From this conception of the nature of language, Humboldt derives his views concerning understanding of speech and acquisition of languageという記述の中で、言語行為 (speech) と言語獲得 (acquisition of language) がandでつながれていることに注目しよう。生成文法では、個々の言語行為の基にあるのは言語能力であり、言語獲得は普遍文法を基にしてなされると考えて

いるが、フンボルトでは、第2節でも説明したように、この二つの概念が区別されておらず、歴史的・発生論的には言語の発生、共時的には言語使用や言語獲得の基になる何か根源的な能力ととらえられていると推測できる。チョムスキーもそのことを理解したうえで生成文法とフンボルトの言語思想を結びつけているのである。Chomsky (1966)からの引用をもう一度見てみよう。そこにはフンボルトのorganic formの概念は明確ではないと述べてある。

For all his concern with the creative aspect of language use and with form as generative process, Humboldt does not go on to face the substantive question: what is the precise character of “organic form” in language. He does not, so far as I can see, attempt to construct particular generative grammars or to determine the general character of any such system, the universal schema to which any particular grammar conforms. In this respect, his work in general linguistics does not reach the levels achieved by some of his predecessors, as we shall see directly. His work is also marred by unclarity regarding several fundamental questions, in particular, regarding the distinction between the rule-governed creativity which constitutes the normal use of language and which does not modify the form of the language at all and the kind of innovation that leads to a modification in the grammatical structure of the language. These defects have been recognized and, to some extent, overcome in more recent work. Furthermore, in his discussion of generative processes in language it is often unclear whether what he has in mind is underlying competence or performance—Aristotle’s first or second grade of actuality of form (*De Anima*, book II, chap. 1). This classical distinction has been reemphasized in modern work. . . . The concept of generative grammar, in the modern sense, is a development of the Humboldtian notion of “form of language” only if the latter is understood as

form in the sense of “possession of knowledge” rather than “actual exercise of knowledge,” in Aristotelian terms. (pp. 27-28)

このように、一見すると、チョムスキーのフンボルト解釈には曖昧なところがあるように見えるが、実は、それは、元々フンボルトの言語思想が（生成文法の観点からすると）曖昧であるということにすぎないのである。生成文法で普遍文法と言語能力として二つに区別されている概念がフンボルトでは区別されておらず、一つの根源的な有機体のように扱われているのであり、チョムスキー自身もそのことは理解しているのである。チョムスキーがフンボルトの言語思想を誤解しているのではないのである。

そして、まとめとして、（生成文法が分類学的で行動主義的なアメリカ構造主義言語学と決別したように）フンボルトの言語学は分類学的で行動主義的な(taxonomic-behaviorist)言語学とは区別されるべきなのであり、生成文法（ここではthe approach presented in this paperと表現されている）は、言語使用と言語習得の研究は基底の生成過程の研究を前提とするという仮定において基本的にフンボルトと同じであると見なすのは歴史的に正確であると結論している。

These rather random remarks and examples suggest that it might be instructive to delineate more precisely a “Humboldtian” and a “taxonomic-behaviorist” point of view concerning the nature of language, and to contrast the approaches to language use and acquisition to which these conflicting viewpoints give rise. I think it is historically accurate to regard the approach presented in this paper as basically Humboldtian in its assumption that serious investigation of language use and acquisition presupposes a study of underlying generative processes (for which, to be sure, actual performance will supply evidence), and that very little is to be expected of direct

operational analysis of “mentalistic” terms or radical behaviorist reductionism of the sort that has been so dominant in modern speculation on language and cognition. (p. 25)

Chomsky (1964)は、フンボルトの言語思想を説明しているのであるが、Humboldt (1836)からの引用部分がなければ、チョムスキーが述べていることは生成文法そのものの説明である。

3.3 Chomsky, N. (1966). *Cartesian linguistics: A chapter in the history of rationalist thought*. New York: Harper & Row.

次にChomsky (1966)を見てみる。本のタイトルは*Cartesian Linguistics*であるが、フンボルトへの言及も多くある。一箇所だけ引用しよう。そこで述べてあることは、フンボルトの見解の説明と称する生成文法の説明である。

チョムスキーの文章には英語とドイツ語が混在しているので、理解しやすいように、川本茂雄（訳）、『デカルト派言語学—合理主義思想の歴史の一章』の該当部分の日本語訳を挙げておく。（「 」で囲まれている部分がドイツ語である。）

人間言語の本質的、定義的な特徴としての言語使用の創造面にデカルト派が与えた強調は、一般言語学の包括的な理論を展開しようとするフンボルトの試みのうちに最も強力な表現を見出す。言語をエルゴン(“Werk”)よりもむしろエネルゲイア(“Thatigkeit”), 「死せる創造物」ein todtes Erzeugtesよりもむしろ「創造」eine Erzeugungとするフンボルトの特徴づけは、デカルト派の言語学と、言語と美学理論についてのロマン主義哲学とに典型的である定式化を一しばしば、ほとんど同じ用語を用いて一拡張し、洗練する。フンボルトにとっては、言語の唯一の真の定義は「発生的」genetischな定義である：「すなわち、分

節音を思考の表現のために力あらしめようとする、永遠に繰返す精神の作業である」(p.57)。この「精神の作業」Arbeit des Geistesの基底には恒常な、一様な因子が存在していて、フンボルトが言語の「形式」と呼ぶものはこれである。言語においては、固定されているのは基底に存在する生成の法則だけである。生成過程がことばの現実の産出、(あるいは、ことばの知覚—フンボルトはこれを部分的に同類の実行とみなす—下記pp. 70-71を参照)において活動する範囲、様態は、全く無限定である。注38を参照。

形式の概念は「語構成」Wortbildungの規則、「根本語」Grundwörterの類を規定する概念構成の規則とともに、「構文の規則」Regeln der Redefügungをも含む (p. 61)。これに対照して、言語の資料(Stoff)は非分節の音、「言語の扶けによる概念構成に先行するところの感覚的印象、自発的精神運動の総体」である (p.61)。言語の形式は、体系的構造である。それはどの個々の要素をも孤立した成分としては一つも保有せず、それらのうちに「言語構成の方法」が発見され得る限りにおいてのみ、これを組み入れる (p.62)。

体系的、統一的な表示の姿で言語の形式を構成する固定した機構は、思考の過程によって課される条件に対応する無限の範囲の発話の生起を作り出すことを、言語に可能ならしめなければならない。言語の領域は無限、無際限であって、「あらゆる思考可能性の総体」(p.122)である。その結果として、一言語の根底的特性は、その有限的に指定可能な機構を使用して、無際限な、予測不可能な偶発の集合に対処する力量でなければならない。「ゆえに言語は有限の手段を無限に使用しなければならないのであって、思考と言語とを産出する力の同一性によってこれをなし得る」(p. 122)。(pp. 25-27) (原文はChomsky 1966, pp. 19-20)

3.4 Chomsky, N. (1988). Language and mind: Challenges and prospects.

Chomsky (1988)はチョムスキーが1988年に稲森財団の京都賞を受賞したときになされた講演である。聴衆には、言語学者も多数いたが、言語学者以外の人も多数いたはずである。その中でもチョムスキーはフンボルトを取り上げている。チョムスキーのフンボルト解釈の研究という観点からは、この講演で、チョムスキーが曖昧なフンボルトの説明を自分流に解釈したことを認めていることが重要である。

What I will call “Humboldt’s problem” is based on observations similar to Descartes’s. Wilhelm von Humboldt observed that language is a system that provides for infinite use of finite means. We may take these finite means to constitute a particular language; to know the language is to have these finite means represented in the mind/brain. Crucially, Humboldt regarded language not as a set of constructed objects—expressions, utterances or speech acts—but rather as a process of generation. Language is *eine Erzeugung* (a process of generation), not *ein todes Erzeugtes* (the “dead” objects generated). With a bit of interpretive license, we might understand him to be saying that a language is a generative procedure that enables articulated, structured expressions of thought to be freely produced and understood.

Notice there is interpretive license in this account. In the early 19th century, one could not clearly distinguish between, on the one hand, an abstract generative procedure that assigns structural descriptions to all expressions, and on the other, the actual “work of the mind” (“Arbeit des Geistes”) that brings thought to expression in linguistic performance. There are passages in Humboldt’s writings that suggest one or the other interpretation, sometimes with fair explicitness, but to attempt to determine

which notion he had in mind is an error, since the two concepts were not clearly distinguished, and could hardly have been, the relevant concepts lacking. A century later, progress in the formal sciences made it possible to formulate Humboldt's problem quite explicitly, as a problem for substantive and productive inquiry. (p. 6)

ここでは、チョムスキーが、With a bit of interpretive license,あるいは、Notice there is interpretive licenseと断っていることに注目してほしい。フンボルトがabstract generative procedureとwork of the mindを区別していたかどうかは分からないと断っている。このことから、チョムスキーが、フンボルトの言語思想が曖昧で漠然としていることを理解した上でフンボルトの言語思想を生成文法流に解釈していることがわかる。

3.5 Chomsky, N. (2006). *Language and mind*. Third edition. Cambridge: Cambridge University Press.

Chomsky (2006)は、自分の考え方とフンボルトの考え方がまったく同じであるかのような記述をしている。ここでは、deep and surface structuresやlinguistic competenceという生成文法の用語を使ってフンボルトの言語思想を説明している。フンボルトの文法構造の概念は現在の生成文法のそれと同じであると述べられている。

To use the terminology Wilhelm von Humboldt used in the 1830s, the speaker makes infinite use of finite means. His grammar must, then, contain a finite system of rules that generates infinitely many deep and surface structures, appropriately related. It must also contain rules that relate these abstract structures to certain representations of sound and meaning—representations that, presumably, are constituted of elements that belong to

universal phonetics and universal semantics, respectively. In essence, this is the concept of grammatical structure as it is being developed and elaborated today. Its roots are clearly to be found in the classical tradition that I am now discussing, and the basic concepts were explored with some success in this period. (p. 15)

以下の説明では、生成文法のlinguistic competenceがフンボルトのform of languageの考え方と同じであると見なされている。

It seems clear that we must regard linguistic competence—knowledge of a language—as an abstract system underlying behavior, a system constituted by rules that interact to determine the form and intrinsic meaning of a potentially infinite number of sentences. Such a system—a generative grammar—provides an explication of the Humboldtian idea of “form of language,” which in an obscure but suggestive remark in his great posthumous work, *Über die Verschiedenheit des Menschlichen Sprachbaues*, Humboldt defines as “that constant and unvarying system of processes underlying the mental act of raising articulated structurally organized signals to an expression of thought.” Such a grammar defines a language in the Humboldtian sense, namely as “a recursively generated system, where the laws of generation are fixed and invariant, but the scope and the specific manner in which they are applied remain entirely unspecified.” (p. 62)

以下の引用では、人間は生得的な普遍文法を使って言語を習得（獲得）するという生成文法と同じ考え方をフンボルトがしていたと見なしている。

Thus, Wilhelm von Humboldt, who is now best remembered for his ideas

concerning the variety of languages and the association of diverse language structures with divergent “world-views,” nevertheless held firmly that underlying any human language we will find a system that is universal, that simply expresses man’s unique intellectual attributes. For this reason, it was possible for him to maintain the rationalist view that language is not really learned—certainly not taught—but rather develops “from within,” in an essentially predetermined way, when the appropriate environmental conditions exist. One cannot really teach a first language, he argued, but can only “provide the thread along which it will develop of its own accord,” by processes more like maturation than learning. This Platonistic element in Humboldt’s thought is a pervasive one; for Humboldt, it was as natural to propose an essentially Platonistic theory of “learning” as it was for Rousseau to found his critique of repressive social institutions on a conception of human freedom that derives from strictly Cartesian assumptions regarding the limitations of mechanical explanation. And in general it seems appropriate to construe both the psychology and the linguistics of the romantic period as in large part a natural outgrowth of rationalist conceptions. (p. 67)

フンボルトの言語思想 = 生成文法といった印象を持つフンボルトの言語思想の説明である。

なお、ここでの引用は、*Language and mind*の第3版からであるが、1968年に出版された*Language and mind*の初版にもまったく同じ記述がある。すなわち、チョムスキーのフンボルト解釈は1968年から2006年の間、何も変わっていないということである。

4 チョムスキーのフンボルト解釈に対する批判

前節でチョムスキーが生成文法はフンボルトまで遡れると主張し、自分の考えとフンボルトの考えの類似点を挙げていることを見たが、チョムスキーのフンボルトの解釈は正しくないという批判が多くある。本節ではそれらのいくつかを紹介しよう。

4.1 Izui, H. (1968). N. Chomsky: Topics in the theory of generative grammar. *Gengokenkyu*, 52, 99-103.

これはチョムスキーの *Topics in the theory of generative grammar* の書評である。

Izui (泉井久之助) の下記の記述を解釈すれば、フンボルトの“Eine Sprache” of the whole humankind (全人類が共通して所有している一つの言語) は非常に曖昧であり、フンボルト自身はそれを具体的に説明しなかったが、チョムスキーは、フンボルトを超えて (Izui は break-through と表現している)、これが具体的に何かを説明する方法あるいは公式を実現する非常に魅力的な一般理論と積極的な手続きを開発したのである。つまり、チョムスキーはフンボルトの“Eine Sprache” of the whole humankind を普遍文法と解釈したということになるのであろう。

But Chomsky did not confine himself within the limits of the Humboldtian thinking. The gist and core of the Humboldtian thinking of language was centered around the problems of the “Eine Sprache” of the whole humankind (VII, 51). But this concept of the “Eine Sprache” was as much of a metaphysical character as that of the “Urpflanze” of Goethe in his botanical theory (Izui 281). Both of them, however do not lack the character of being entities respectively. But the concept of the “Eine Sprache” is by its very nature highly ambiguous and elusive (unerschassbar) at any rate, so much

so that Humboldt himself gave up his mind at last to realize any explicitly rational (i. e. categorical and specific-language independent) device of describing objectively not only the “Eine Sprache” but, more than that by extension, also any natural language in particular, though, concerning the latter case especially, he had once been very eager to set up this kind of fully general formulae of complete descriptive adequacy (his letter to Schiller, 11-v-1795 ; Izui 138). Chomsky’s great merit is that he has made here a brilliant break-through (“Durchbruch”, to use an emotional term of German philosophy) where Humboldt had hesitated to take any positive step further, and has developed a highly attractive general theory and positive procedure opening a novel way leading to realize such a device or formulae as was desired and yet missed by Humboldt. (pp. 99-100)

Izui (1968)は、チョムスキーがフンボルトを誤解しているとは言っていない。Izui (1968)は、チョムスキーがフンボルトが曖昧なままにしておいたことを自分流に解釈したということを見抜いているのである。

4.2 福本喜之助. (1982). 『フンボルトの言語思想とその後世への影響』. 大阪：関西大学出版部.

福本(1982)はフンボルトとチョムスキーの間にはずれがあるという見解を述べている。

ここまで来れば、Humboldtが本来意図したであろうと思われるところからのずれは十分明らかであろう。Humboldtは確かに人間と言語の深い結びつきを強調したが、Humboldtの場合の人間は何にもまして、ある特定の言語社会に属するものとして想定された人間であった。生得の言語能力を伴う人間の精神は自らをとりまく特定の環境と対し、

それと交りを持ち、自らの言語を生み出す。生み出された言語は、今度は人間の精神に対してその働きの方向を定めるような機能を持ちうる。このような人間の精神と言語の間の相互作用を、異なる言語社会におけるさまざまな現われ方として捉えるのがHumboldtの大きな関心であったに違いない。その著書の標題にも現われている通り、そこでは当然「多様性」の問題が重きを占めるはずである。

同じように言語能力を備えた人間を想定していても、Chomskyの場合は、それは抽象的、いわば無の空間に置かれた人間であった。ただ一人、果しなく続くモノローグで永遠の言語的反芻を繰り返している人間に近い姿である。したがって、言語の普遍的特徴ということは問題になることはあっても、多様性の方は直接問題になるような設定ではなかった。(p. 445)

チョムスキーは余りにも自分に引きつけてフンボルトを読んでいるというのが福本(1982)の解釈である。

Humboldt自身の叙述に含まれる例の独特の曖昧さという要因はもち[ろ]んであろうが、Chomskyは余りにも自分に引きつけてHumboldtを読んでいるとしか思えない。(p. 446)

福本(1982)のこの批判は、フンボルトの叙述が曖昧であることを理解した上でチョムスキーが生成文法流にフンボルトを解釈したと言っていると解釈すればよいであろう。

4.3 Markova, I. (1983). The origin of the social psychology of language in German expressivism. *British Journal of Social Psychology*, 22, 315-325.

Markova (1983)は、フンボルトのthe form of languageはthe underlying structure of language through which the individual languages reveal themselvesを意味すると解釈した上で、フンボルトがthe underlying identities of languageを明確にしなかったので、チョムスキーがこの考えを誤解したと述べている。

Humboldt points out that since all human beings have a universal tendency to express themselves in language, and ‘since all men must carry the key to the understanding of all languages in their minds, it follows automatically that the form of all languages must be fundamentally identical’ (*ober die Kuwi-Spruche*, I, p. cccxiv). By the form of language, or the morphology of language, Humboldt meant the underlying structure of language in general through which the individual languages reveal themselves. Just as there is an underlying similarity in all human physiognomies yet each individual has his own particular features, so all languages are fundamentally identical although each of them is always an expression of the individual intellectual life of a nation. As Humboldt puts it:

The individuality is undeniably there, yet similarities are evident. However, no measurement and no description of the components in detail and in their interconnection are capable of summarizing the individual nature in a single concept. It is based on the totality, and yet on the individual interpretation as well (*Uber die Kuwi-Sprache*, I, p. ix).

It appears that Humboldt’s notion of the form of language expresses the same idea as in Hegel’s claim that a universal manifests itself through a particular (Hegel, 1830; Markova, 1982). Unfortunately, since Humboldt was

not specific about the underlying identities of languages his ideas have been misunderstood by the rationalists on the one hand (Chomsky, 1966) and by the relativists on the other (Brown, 1967; Miller, 1968) as we shall note later.
(p. 320)

第3節でも述べたように、筆者の判断では、チョムスキーは、フンボルトのform of languageという概念を誤解したのではなく、フンボルトのこの概念が曖昧で漠然としていることを理解した上で、フンボルトの概念を生成文法流に解釈したのである。

さらに、Markova (1983)は、フンボルトのform of languageはdynamicであるが、チョムスキーの言語普遍性の概念はデカルト流でありstaticであると、その違いを指摘している。

In contrast, Chomsky (1966) classifies Humboldt as a representative of Cartesian linguistics and as one of the predecessors of his own concept of linguistic universals. Thus he interprets Humboldt's 'form of language' as a fixed mechanism that contains no particulars. Chomsky's own concept of the linguistic universal, of course, is Cartesian, i.e. static, and it ignores particulars. Humboldt's linguistic universals, on the other hand, are dynamic and manifest themselves through particulars just as in Hegel (Markova, 1982). (p. 324)

4.4 Manchester, M. L. (1985). *The philosophical foundations of Humboldt's linguistic doctrines*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.

Manchester (1985)は、チョムスキーのinner formの解釈に対するCosieriu (1970)の反論を紹介している。Manchester (1985)によれば、チョムスキーは、

彼の*Cartesian Linguistics*で、フンボルトのform of languageはsystem of rules, grammatical and phonetic, which are employed in creating sentencesを意味しており、これらの規則は自分の生成規則あるいは変形規則に対応すると主張しているが、Coseriu (1970)は、変形文法の深層構造はフンボルトのinner formとは何の関係もないと反論しているとのことである。¹⁰

Perhaps the most lively debate over interpretation of ‘inner form of language’ was initiated by Noam Chomsky’s effort to appropriate Humboldt as part of the history of ‘Cartesian linguistics’. In his book *Cartesian Linguistics* Chomsky (1966: 19) argued that by the ‘form of language’ Humboldt meant essentially the system of rules, grammatical and phonetic, which are employed in creating sentences. These rules would correspond to what Chomsky called ‘generative rules’, or sometimes ‘transformational rules’:

There is a constant and uniform factor underlying this ‘Arbeit des Geistes’; it is this which Humboldt calls the ‘Form’ of language. It is only the underlying laws of generation that are fixed, in language. . . . The concept of Form includes the ‘Regein der Redefugung’ as well as the rules of ‘Wortbildung’ and the rules of formation of concepts that determine the class of ‘Grundwörter’.

In 1970 Eugenio Coseriu published an article, “Semantik, innere Sprachform und Tiefenstruktur”, which is primarily a rebuttal of Chomsky’s interpretation of Humboldt. Coseriu argues (1970: 53) that Chomsky’s assertion of a parallel between Humboldt’s ‘Sprachform’ and Chomsky’s ‘generative rules’ fails to appreciate that Humboldt’s concepts are rooted

in different ‘Denkweisen’. He examines (1970: 58) three meanings of the concept of ‘form’ in Humboldt, as applied to language, and concludes that “The deep structure of transformational grammar has absolutely nothing to [do] with Humboldtian inner form”. (pp. 9-10)

Manchester (1985)は、チョムスキーはフンボルトのform of languageを正しく解釈していないという議論を紹介している。まず、チョムスキーはform of languageをa set of generative rulesと解釈しているが、フンボルトのformにはダイナミックな意味があり、that which is formedという意味はないという Coseriu (1970)の反論を紹介している。さらに、フンボルトはすでに確立した言語の産出（つまり文の派生）ではなく諸言語の産出に関心があったのであり、文の生成を扱うチョムスキーのrules of production, あるいは深層構造はフンボルトのformではありえないと述べている。

I begin with Chomsky’s claim that the Humboldtian concept of ‘form of language’ anticipates the theory of ‘deep structure’ developed by transformational grammar. Chomsky (1966: 26-27, and cf. 22-24) regards the notion of the ‘Form of language’ as the set of rules, both syntactic and semantic, which govern sentence production in a given language:

As noted above, the form of language, for Humboldt, embraces the rules of syntax and word formation as well as the sound system and the rules that determine the system of concepts that constitute the lexicon.

Chomsky’s work has spawned a new series of articles on the notion of form in Humboldt, perhaps the most instructive of which is Coseriu’s

(1970). He criticises Chomsky's view, that the form of a language is a set of generative rules, on the grounds that, for Humboldt, 'Form' always has an active or dynamic sense, rather than the sense of 'that which is formed':

In fact, 'Form' in Humboldt means always only something 'which shapes' (gestaltet) something, the forming thing (das Gestaltende) in respect to the 'formed thing' (das Gestaltete). (Coseriu 1970: 53)

Further, since Humboldt is concerned with the production of languages, and not that of sentences within an already established language, Chomsky's 'rules of production' (or deep structure) cannot be a Humboldtian 'form':

The so-called 'rule-governed creativity', the 'production of new sentences', i.e., the mere employment of the particular language in speaking was indeed, in the Humboldtian understanding of language, not creativity at all, not language production, not properly activity or 'Energieia'. Chomsky's rules of production would therefore belong, for Humboldt, precisely to the produced things, not to the production. (Coseriu 1970: 55)

What this little controversy points out fairly clearly with respect to Humboldt's use of form is that, in Coseriu's terms, 'Form' means in general 'a forming thing'. Chomsky (1966: 22-23) himself has pointed out that Humboldt's usage of 'form' comes out of the discussion in the romantic period of the distinction between 'mechanical form' and 'organic form'. Gipper similarly has related Humboldt to the distinction discussed by Goethe between 'forma formans' and 'forma formata'; Humboldt's 'form' must not

be seen as a static ‘ergon’ or product such as a system of grammatical rules, but rather as a ‘forming force’ (Formkraft). (pp. 83-84)

Manchester (1985)は、フンボルトのformにはいろいろな意味があることを指摘した上で、チョムスキーがフンボルトのformをgrammatical systemと見なしたのは完全に間違いとは言えないが、あまりに狭すぎる解釈であると結論づけている。

In light of Humboldt’s varying uses of form under this one guiding meaning, any effort to identify the meaning of ‘form’ by pointing to some particular location in Humboldt’s theory is doomed to failure. Chomsky’s identification of ‘form’ with the grammatical system is not completely wrong, just too narrow a view. (p. 86)

ここでは、フンボルトのform of languageが問題にされているが、フンボルトのform of languageの定義は曖昧である。第3節でチョムスキーのフンボルト解釈を検討し、チョムスキーはフンボルトのform of languageを、ある場合には言語能力と、ある場合には普遍文法と解釈していることを指摘したが、それは、フンボルトが、生成文法の言語能力のことをいっているのか、あるいは、普遍文法のことをいっているのか、あるいは、両者を含めたようなもののことをいっているのか曖昧だからなのである。先ほどにも述べたが、筆者は、フンボルトは、何か根源的な有機体によって、歴史的・発生論的に人間が言語を持つようになった過程のことを、子供が言語を習得する過程のことを、そして共時的な文の生成のことを説明しようとしているのではないかという印象を持っている。

4.5 Trabant, J. (2001). 『フンボルトの言語思想』. 村井則夫 (訳). 東京: 平凡社.

Trabant (2001)は、チョムスキーに限らず、フンボルトが正しく理解されていないことを指摘している。

しかしながら、二十世紀の言語学においてフンボルトの概念と構想がこのように多くのところで見られるとはいっても、これはかならずしも、フンボルトのテキストを広く読み込んだうえでなされているというわけではない。フンボルトの浸透ぶりは比較的表面的なものであり、そのことは、フンボルトを権威として引き合いに出している著者たちが、ほとんど判で押したように、『カヴィ語研究序論』の同じ箇所、特に第一〇節から第一四節まで、せいぜいのところ三〇節までしか引用していないという事実からも窺える。

それと同時に、フンボルトの著作の内的構造が解明されていない以上は、いかにフンボルトが言及されようとも、現代言語学はなおも十九世紀の言語学の姿勢をそのまま引き継いでいるのである。トムセンの記述においてはかなり明確に、十九世紀の言語学—主導的理論であるいわゆる歴史的・比較言語学—がフンボルトから学んだことは何もないと明言されていたが、現代言語学の文脈に根ざした言語学史は、今日の言語学がフンボルトから学んだと思われるものを明らかにしようとしている。そこにおいてフンボルトは、言語学的考察全般に関わる基本的概念を作り上げた重要な言語思想家として、常に言及されている。フンボルトは現代言語学の先駆者として、通時的言語学に逆らって、共時的言語学の理念を提示したが、これは生成論的な観点ではなく、言語分類（類型学）の思想をその頂点とするものである。(pp. 184-185)

ここで、Trabant (2001)は、「フンボルトは現代言語学の先駆者として、通時的言語学に逆らって、共時的言語学の理念を提示したが、これは生成論的な観点ではなく、言語分類（類型学）の思想をその頂点とするものである」と言っているが、「生成論的な観点ではなく」という説明が正しいどうかは分からない。ただ、フンボルトが言語分類に力点を置いていたのは事実である。

しかし、チョムスキーがフンボルトに言及したことによってフンボルトへの関心が高まったことは認めている。

チョムスキーがフンボルトに言及して以来ようやく、フンボルトが世界的に熱心に論じられるようになった。チョムスキーがフンボルトを活用したこと—これは総じてフンボルトの意に沿ったものではなかったが—は、フンボルトへの注目を促すのに決定的な役割を果たした。(pp. 187-188)

Trabant (2001)が「チョムスキーがフンボルトを活用した」と言っていることは、チョムスキーが生成文法を正当化／正統化するためにフンボルトを利用したと解釈できるが、この点については第5節で説明する。

5 チョムスキーがフンボルトに言及する理由

それでは、なぜチョムスキーはフンボルトに言及するのかを考えてみよう。

チョムスキーがデカルトとフンボルトを詳しく論じているのは、Chomsky (1964)とChomsky (1966)であり、いずれも1960年代の著作であり、1970年代以降になると、デカルトとフンボルトに言及はするもののそれほど詳しくは論じていない。これは、1960年代は、構造主義言語学に対抗し、生成文法を広めなければならない時代であったからであろう。生成文法の正当性／正統性を主張するためには、生成文法の考え方がデカルトやフンボルトにまで遡

れ、ヨーロッパ思想史の長い伝統がその背後にあるといういわば「権威づけ」が必要であったと言えるかもしれない。ちょうど、日本の戦国武将が自分は源氏の子孫であると主張したように。チョムスキーがそれを意図したのか意図していなかったのかはわからないが、結果的には「権威づけ」と見なされても仕方ないかもしれない。

Hamans & Seuren (2010)も、チョムスキーは生成文法を正当化／正統化するためにデカルトに言及しているのであり (Hamans & Seuren (2010)のタイトルが“Chomsky in search of a pedigree”であることがこのことを示している)、しかも、それは根本的に失敗であったと述べている。

Having achieved a unique position of supremacy in the theory of syntax and having exploited that position far beyond the narrow circles of professional syntacticians, he [Chomsky] felt the need to shore up his theory with the authority of history. It is shown that this attempt, resulting mainly in his *Cartesian Linguistics* of 1966, was widely, and rightly, judged to be a radical failure, even though it led to a sudden revival of interest in the history of linguistics. (p. 377)

しかし、チョムスキーが生成文法とデカルトを結びつけるのに失敗しているとしても、それはかまわないとも言える。それは、チョムスキーの生成文法理論自体が間違っていることは意味しない。デカルトやフンボルトの言語理論とチョムスキーの言語理論は別物であるからである。

また、フンボルトの言語思想は曖昧で漠然(vague)としている。使っている用語の定義も曖昧で漠然としている。したがって、読む人ごとに解釈が異なっても当然であろう。チョムスキーの解釈もこのような多くの解釈の一つにすぎないと思えばよいのである。

チョムスキーがフンボルトを引き合いに出す理由として、生成文法の正当

化／正統化、あるいは、権威づけを挙げるのは確かに正しいかも知れない。しかし、チョムスキーがフンボルトを引き合いに出す（多分、言語学的理由以上に）重要な理由がもう一つある。それは、チョムスキーがフンボルトの政治思想に共感していることである。次節では、そのことについて説明する。

6 チョムスキーとフンボルトの政治思想

チョムスキーが米国の外交政策を批判し、反戦活動などを行っている政治活動家であることはよく知られていることである。チョムスキーがフンボルトに言及する理由は言語学の観点からだけではなく、実は、チョムスキーの政治思想の観点からも検討しなければならないのである。

チョムスキーがフンボルトに言及するのは、生成文法の考え方とフンボルトの言語思想に類似点を見いだしているからであるが、実は、チョムスキーはフンボルトの政治思想にも共感しているのである。

亀山(2000)にフンボルトの政治思想に関する次のような記述がある。

やがて、国家とは何か、国家と個人との関係はどうあるべきか、という問題意識に基づき、彼〔フンボルト〕は二篇の国家論を執筆する。『国家の憲法について—フランスの新しい憲法を機縁として』と『国家活動の限界を決定するための試論』がそれである。(p. 4)

ところで、フンボルトの『国家活動の限界を決定するための試論』の論文の主眼は、個人の自由の問題である。「国家は人間のために存在するのであって、人間が国家のためにあるのではない。国家の行なうさまざまな施策はそれ自身が目的ではなく、人間の全人的形成(Bildung)に奉仕する手段たるにすぎない。国家のなし得る最も積極的なことは、市民の自発的な活動にいささかでも影響を及ぼすようなことから手を引くことである。……国民の多くは広範な自由を耐え

るほど成熟してはいない、というのは抑圧を永続させるための口実にすぎない。」これがフンボルトの国家論の骨子である。(pp. 4-5)

そして亀山(1978)は、チョムスキーがフンボルトのこの政治思想に共感していることについて次のように述べている。

また、アメリカの言語学者チョムスキ（一九二八—）はその『デカルト流の言語学』（一九六六年）の中で、参考文献として、フンボルトの『人間の言語構造の相違性と、人類の精神的展開に及ぼすその影響について』（『カヴィ語研究序論』、一八三六年）という遺作の大きな言語学の論考と並んで、言語学とは直接には関係のない、この「国家活動の限界を決定するための試論」を挙げている。けだし、チョムスキー自身、言語問題を考察するときの大前提として、国家権力に対する個人の自由を確立するという問題の重要性を痛感していたからであらう。チョムスキーは更に、『国家の存在理由のために』（一九七〇年）の最終章「言語と自由」の中でも、フンボルトのこの論文に触れ、十八世紀末葉に記されたものでありながら、この論文に示されている人間の自由の意味は不朽のものであり、「官僚制度と専制国家に対するフンボルトの批判は、近代史に生じてきたさまざまな暗い側面に対する何よりも雄弁な予言的警告であったし、彼の批判の基礎となっている考え方は、彼自身が想像したよりも遙かに広い範囲で、すべての抑圧的な組織に対抗するものとなり得る。」と述べている。そして、フンボルトの自由を重んずる考え方が、同時に彼の言語論の根底を流れていることをも指摘しているのである。(pp.69-70)

実際にフンボルトの政治思想を見てみよう。Humboldt (1993)（『国家活動の限界を決定するための試論』の英訳版）は、国家と個人の関係について次の

ように述べている。

Still I hope I have said enough to make my own position in this essay clearer, or to show that the chief point to be kept in view by the State is the development of the powers of its citizens in their full individuality; that it must, therefore, pursue only that object which they cannot procure for themselves, namely security; and that this is the only true and infallible way to connect, by a strong and enduring bond, two apparently incompatible things: the general end of the State and the ends of all the individual citizens. (pp. 132-133)

Chomsky (1966)は、このフンボルトが国家権力に対する個人の自由を擁護していることに共感し、フンボルトの言語思想を理解するためにはフンボルトの政治思想を理解する必要があることを強調している。

Finally, we should note that Humboldt's conception of language must be considered against the background provided by his writings on social and political theory and the concept of human nature that underlies them. Humboldt has been described as “the most prominent representative in Germany” of the doctrine of natural rights and of the opposition to the authoritarian state. His denunciation of excessive state power (and of any sort of dogmatic faith) is based on his advocacy of the fundamental human right to develop a personal individuality through meaningful creative work and unconstrained thought . . . (p. 24)

そして、Chomsky (1966)は、フンボルトが言語の創造性を強調するのは彼の人間の本質に対する考え方から生じるものであると述べている。

It is clear, then, that Humboldt's emphasis on the spontaneous and creative aspects of language use derives from a much more general concept of "human nature," a concept which he did not originate but which he developed and elaborated in original and important ways. (p. 26)

チョムスキーは、生成文法の研究と彼の政治活動は何の関係もない（むしろ言語学の研究は、時間を取るなので、自分の政治活動の邪魔をする¹¹）と言うが、実は、フンボルトの言語思想と政治思想は切っても切れない関係にあることを知っており、チョムスキーがフンボルトに言及するのも、自分の言語思想と政治思想がフンボルトの言語思想と政治思想が同じであるからであると判断してよい。チョムスキーがフンボルトに言及する背後にはこうした理由があることを忘れてはならない。

Chomsky (1987)は、元々は、1970年にシカゴにあるLoyola Universityでの講演であるが、この中でもチョムスキーはフンボルトの政治思想について説明している。

Chomsky (1987)は、そのタイトルが“Language and freedom”であることから分かるように、言語と自由についての講演である。まず、この講演の冒頭で、チョムスキーがどのように言っているかを見てみよう。

When I was invited to speak on the topic “language and freedom,” I was puzzled and intrigued. Most of my professional life has been devoted to the study of language. There would be no great difficulty in finding a topic to discuss in that domain. And there is much to say about the problems of freedom and liberation as they pose themselves to us and to others in the mid-twentieth century. What is troublesome in the title of this lecture is the conjunction. In what way are language and freedom to be interconnected?

(p. 139)

チョムスキーは、言語学と自由の問題それぞれについて語ることは難しいことではないが、両者を結びつけるのは難しいと言っている。しかし、冒頭で、言語と自由の関係について講演をするのを依頼された時には困った (puzzled) が、同時に、興味をそそられた (intrigued) と言っていることに注目すべきである。チョムスキーは最終的には言語研究と自由を擁護する政治活動を結びつけるのである。

チョムスキーは、この講演をまずルソーの『人間不平等起源論』(原題は *Discours sur l'origine et les fondements de l'inégalité parmi les hommes*, 英語題名は *Discourse on Inequality*) から始め、その後にはフンボルトの話に入っていく。

チョムスキーは、まず、言語と自由の間の密接な関係について説明している。言語は人間の心／精神(mind)と人間の自由な思想と自己表現を知る手掛かりであり、言語を研究することは人間の精神の深い理解につながるのであると述べている。

Were we to combine these speculations, we might develop an interesting connection between language and freedom. Language, in its essential properties and the manner of its use, provides the basic criterion for determining that another organism is a being with a human mind and the human capacity for free thought and self-expression, and with the essential human need for freedom from the external constraints of repressive authority. Furthermore, we might try to proceed from the detailed investigation of language and its use to a deeper and more specific understanding of the human mind. Proceeding on this model, we might further attempt to study other aspects of that human nature which, as Rousseau rightly observes, must be correctly conceived if we are to be able to develop, in theory, the

foundations for a rational social order. (p. 145)

そして、フンボルトが自分の言語思想と自由主義的社会思想をはっきりと関係づけてはいないが、両者の間には共通の地盤があるとチョムスキーは述べている。

Humboldt was, on the one hand, one of the most profound theorists of general linguistics, and on the other, an early and forceful advocate of libertarian values. (p. 148)

Though he [Humboldt] does not, to my knowledge, explicitly relate his ideas about language to his libertarian social thought, there is quite clearly a common ground from which they develop, a concept of human nature that inspires each. (p. 148)

そして、言語を研究することは人間が生き活動している道徳体系と社会構造の研究にまで及ぶと述べている。言語は心／精神(mind)を写す鏡なのである。

Conceivably, we might in this way develop a social science based on empirically well-founded propositions concerning human nature. Just as we study the range of humanly attainable languages, with some success, we might also try to study the forms of artistic expression or, for that matter, scientific knowledge that humans can conceive, and perhaps even the range of ethical systems and social structures in which humans can live and function, given their intrinsic capacities and needs. Perhaps one might go on to project a concept of social organization that would—under given conditions of material and spiritual culture—best encourage and accommodate the

fundamental human need—if such it is—for spontaneous initiative, creative work, solidarity, pursuit of social justice.

I do not want to exaggerate, as I no doubt have, the role of investigation of language. Language is the product of human intelligence that is, for the moment, most accessible to study. A rich tradition held language to be a mirror of mind. To some extent, there is surely truth and useful insight in this idea. (p. 155)

チョムスキーにとって、フンボルトはドイツにおける人間固有の権利と権威的国家への対抗という心情の最も卓越した代表なのである。

In his book *Nationalism and Culture* (London: Freedom Press, 1937), Rucker describes Humboldt as “the most prominent representative in Germany” of the doctrine of natural rights and of the opposition to the authoritarian state. (p. 435, note 15)

チョムスキーは、注11で紹介したNHKの番組の中で、言語学の研究と世界分析はまったく無関係と言っているが、その番組の中で、彼の言語学と反戦運動の関係について次のようにも述べている。

言語学と私の反戦運動の関係をよくきかれるのですが、論理的な関係性はありません。でも、その二つに共通しているものがあるとすれば、何か私の中に共通の基盤のようなものはあるかもしれません。私が言いたいのは、人には他の動物や機械などにはない特別な能力があるということです。その能力によって、言葉を自由に操り、感情や精神状態に左右されずに相手と話し合うことができるのです。そして新しい発想を生み出すこともできるのです。この能力こそが人間の英知と意

志の源ではないでしょうか。

チョムスキーは、言語学と自分の反戦運動に共通の基盤のようなものがあると言っている。実は、チョムスキーの言語思想と政治思想の間には、フンボルトの場合と同じように、密接な関係があるのであり、それ故に、チョムスキーは、生成文法の考え方がフンボルトにまで遡れると主張していると思われる。もし、チョムスキーがフンボルトの政治思想に共感していなかったならば、チョムスキーは生成文法を論じる際にフンボルトを引き合いに出さなかったかもしれない。

Chomsky (2015)は、チョムスキーが2014年3月5日と3月6日に上智大学で行った講演（3月5日の『言語の構成原理再考』と3月6日の『資本主義的民主制の下で人類は生き残れるか』）を収録したものであるが、その講演会の「閉会の辞」で、福井直樹氏がチョムスキーの言語思想と政治思想の間には関連があることを指摘している。

ごく簡単にチョムスキー教授が今回行った二つの講演についてまとめてみます。「チョムスキーは二人いる」とは昔からよく聞く表現です。科学者としてのチョムスキーと政治社会思想家としてのチョムスキーです。では、それら二人のチョムスキーはどう関係しているのか。これもよく聞かれる疑問ですが、これについてはチョムスキー教授はなかなかはっきりとした答えはせず、解答を避けているようなところがありました。しかし今回の講演で初めて、チョムスキー教授はこの問題を正面に据えて、「二人のチョムスキー」を結びつける形で話をしました。それは、「我々はどのような生き物なのか」という根本的問題に対する解答として浮かび上がってくる結びつきです。この問題に関する第一型は「我々はどのような認知的生き物なのか」というものですが、これに関しては、チョムスキー教授は科学的解答を提

示しました。昨日の講演『言語の構成原理再考』において詳述された内容です。

それに対して、問題の第二型「我々はどうのような社会的生き物なのか」については、科学的解答はおそらく原理的に一存在しません。ですから、本日の講演『資本主義的民主制の下で人類は生き残れるか』において、チョムスキー教授は、彼が考える人間の本質に基づいて、我々人類はどうのような社会的生き物であるべきか—そして、あってしかるべきか—ということについての希望を語ったのです。昨日の講演で詳しく述べられたように、私たちはその生物学的形質として言語機能というメカニズムを与えられています。言語機能は人間が自由に思考し、自由に表現することを可能にします。人類が持つこの認知的生き物としての本質に基づいて、私たちは社会的生き物としても、自由に創造的かつ協同的な生き物であってしかるべきなのです。これが、チョムスキー教授が持つ基本的な(広い意味での)「哲学」なのです。むろん、科学的認識と社会政治的論点を結びつけようとするときは、常に慎重でなければなりません。直接的にこれら二つの領域を結びつけることは不可能です。チョムスキー教授の科学研究と政治社会思想に関しても、演繹的な関係は存在しません。しかし、ひとりの知識人の内にある二つの知的側面として、彼の科学研究と政治社会思想の間には原理的な整合性がなければならぬでしょう。「二人のチョムスキー」の間には完全な整合性が—そしておそらく深い連関が—あるということが、昨日と今日の二つの講演において十分に示されたと思います。(Chomsky 2015, pp. 115-116)

また、Chomsky (2015)の編訳者である福井と辻子は、この本の中の「ノーム・チョムスキーの思想について」という章で、次のように述べている。

人間には他の生物にはない言語機能が生物学的に与えられており、この言語機能によって、人間は無限の言語表現を生成する能力を発揮できる。そして、生成された無限の言語表現が人間に自由な思考能力と理性の力を与え、この能力を基にして、人間は状況に適した—しかし状況によって因果的にしばられてはいない—言語行動を行なうことが出来る。つまり、言語機能によって人間はその本性として自由で創造的な力（理性の力）を与えられているのである。そうであれば、人間の本質的な特性を最大限に活かせるような形で社会も構成されているべきであり、人間の本質である自由を抑えつけるような社会体制には強く反対しなくてはならないという態度が導き出される。こうして、生成文法が提出する言語観・人間観と政治的立場としてのラディカル・リベラリズムは、チョムスキーの思想の中で、「理性」の概念を通して、いわば収斂するのだと思う。(p. 198)

このように、チョムスキーとフンボルトの政治思想には共通点があり、それ故にチョムスキーはフンボルトを引き合いに出すのである。

Rai (2005)のチョムスキーの政治思想に関する次の記述もこのことを意味している。¹²

The Enlightenment was a broad, scattered, phenomenon, but there were certain commonalities to the thought of the period. Chomsky suggests that the ideals of the Enlightenment were the ideas that “people had natural rights, that they were fundamentally equal, that it was an infringement of essential human rights if systems of authority subordinated some to others, the insistence that there were real bonds of unity and solidarity among people across cultures,” and so on (Chomsky 1988a: 764.) (pp. 231-232)

Wilson (2005)も、以下のように、まず、チョムスキーの思想がデカルトの流れを汲むものであることを指摘した上で、

Chomsky, like Descartes, thinks of the person as an intellect associated with a will that freely chooses its course of action: humans are “free agents” who probably have a corresponding “instinct for freedom.” (p. 241)

次のようにチョムスキーとフンボルトの関係を説明している。

So how do these premises and distinctions influence particular social practices? Unsurprisingly, Chomsky admires the libertarian-romantic Wilhelm von Humboldt (Chomsky 1993d: 19), who observed “It is the prosecution of some single object, and in striving to reach it by the combined application of his moral and physical energies, that the true happiness of man, in his full vigor and development, consists” (Humboldt 1993: 3-4). This kind of fulfillment can only arise when an individual has the opportunity to choose a particular goal and when the path to that goal offers a variety of situations: “Even the most free and self-reliant of men is hindered in his development, when set in a monotonous situation” (Humboldt 1993: 10). (p. 244)

Wilson (2005)は、チョムスキーの理想とする社会が「自由主義的社会主義」、あるいは、「アナルコ - サンディカリズム」であると解説している。アナルコ - サンディカリズムとは、広辞苑（第六版、DVD-ROM版）によれば、「(アナルコは無政府主義、サンディカリズムは労働組合主義の意)すべての政治権力を排除し労働組合の指導による社会を目指す思想・運動」である。

Reflecting human beings' need to exercise choice and to associate,

Chomsky's ideal form of social organization is based on his view of the individual as a creature that needs to be creative and to freely associate with others for the fulfillment of common aims. Thus, for Chomsky, the ideal form of social organization is one that minimizes external authority (anarchism) and allows for free association of individuals (syndicalism). The result, which he calls "libertarian socialism" or "anarchosyndicalism," maximizes the opportunity to exercise autonomy, freedom, and creativity on the one hand, while finding friendship, solidarity, and love, on the other. (p. 244)

福井が「言語機能は人間が自由に思考し、自由に表現することを可能にします。人類が持つこの認知的生き物としての本質に基づいて、私たちは社会的生き物としても、自由で創造的かつ協同的な生き物であってしかるべきなのです。これが、チョムスキー教授が持つ基本的な(広い意味での)「哲学」なのです。」(Chomsky 2015, p. 116) と言っているように、チョムスキーの言語思想と政治思想には共通の基盤があり、そして、その基盤がフンボルトの言語思想と政治思想の基盤と同じであるが故に、チョムスキーはフンボルトを引き合いに出すのである。

7 まとめ

本稿では、チョムスキーが、フンボルトを正しく解釈しておらず、独自の解釈をしていると批判されているが、それは、フンボルトの言語思想そのものが曖昧で漠然としていることに原因があるからであり、チョムスキーはフンボルトの言語思想が曖昧で漠然としていることを理解した上で生成文法流にフンボルトの言語思想を解釈していることを指摘した。また、チョムスキーがフンボルトの言語思想を独自に解釈しているとしても、生成文法そのものが間違っていることは意味しないことを指摘した。そして、チョムスキーが生成文法の考え方がフンボルトまで遡れると言っていることが、チョムス

キーが意図していたかどうかは別にして、生成文法の権威づけになっていることも指摘した。さらに、チョムスキーがフンボルトに言及する本当の理由を理解するためには、チョムスキーがフンボルトの言語思想だけでなく政治思想にも共感していることを知る必要があることも指摘した。チョムスキーの言語学者としての活動と政治活動には共通の基盤があり、両者の間には整合性があるということも確認した。

謝 辞

筆者はドイツ語は得意ではないので、フンボルトのドイツ語の文章の日本語への翻訳は同志社大学文学部哲学科教授の田端信廣氏にご厚意でやっていただいた。氏のご厚意に感謝する。また、本稿の最終稿を完成させるにあたっては、『同志社大学英語英文学研究』の二名の査読者のコメントが大変参考になった。両氏に御礼を申し上げる。

注

- 1 弟が自然科学者として有名なアレキサンダー・フォン・フンボルト(Alexander von Humboldt)である。
- 2 たとえば、自然科学としての言語学と文法の心的実在性(psychological reality of grammar)の問題は中井(1999)に、言語の生得性(innateness)とモジュール性(modularity)の問題は中井(2008)に、再帰性(recursion)の問題は中井(2015)にまとめた。
- 3 ここで紹介した二冊の本の日本語の書名は亀山によるものである。Humboldt(1836)の『人間の言語構造の相違性と、人類の精神的展開に及ぼすその影響について』の亀山による日本語訳の書名は『言語と精神—カヴィ語研究序説』となっている。
- 4 筆者はドイツ語は得意ではないので、引用は日本語訳を使用する。引用は、すべて亀山訳のHumboldt(1984)からである。亀山は、Humboldt(1836)の初版本ではなく、プロイセン科学アカデミーの編纂による『ヴィルヘルム・フォン・フンボルト著

作集』の第七巻（アルベルト・ライツマン編，1907）所収のものを底本として訳したとのことである。

また、引用文中の下線は原文にはなく、筆者が強調のために付け加えたものである。以下、本稿の引用文中の下線はすべて筆者が強調のために付け加えたものである。

- 5 本稿ではlanguage acquisitionを「言語習得」と表現しているが、生成文法では、言語は習い覚えるものではなく、自然に身につくものであるという考え方から、現在では、生成文法学者は、「言語習得」ではなく「言語獲得」という用語を使用する。
- 6 チョムスキーは、フンボルトがthe universal schema to which any particular grammar conformsの一般的性質を決めなかったと述べているが、このthe universal schema to which any particular grammar conformsは生成文法の普遍文法に等しいと解釈できる。
- 7 フンボルトの言語思想は曖昧でよくわからないのであるが、木村(1980)はフンボルトはゲーテから大きな影響をうけているので、ゲーテとの思想的関連を考察すればフンボルト思想が明らかになると言っている。

言語哲学者としてのヴィルヘルム・フォン・フンボルトの言語思想形成にさいて、ヘルダー、カント、シラーおよびゲーテのそれぞれ言語論、批判哲学および美的ヒューマニズムが大きな影響を及ぼしていることは、現在に至るまで最も包括的なフンボルト研究書の著者R・ハイムによってつとに指摘されている。それはフンボルトがドイツ・イデアリスムスおよび古典主義の系譜に立つ思想家であることを示しているが、ゲーテ自身ヘルダー、カントおよびシラーから強い影響を受けているので、ゲーテとの思想的関連を十分に考察しさえすれば、フンボルトの言語思想の古典主義的特徴もおのずから明らかになってくるように思われる。(p. 63)

そして、フンボルトの思想がいかにゲーテのものと類似しているかを論じている。

いずれにしても、ゲーテの自然研究が経験的事実から理念を志向する自然の現象学であるとするれば、フンボルトの言語研究はどちらかといえば精神の現象学であり、それは後述するように最終的には内的言語形式としての「原型」の解明をめざしている。しかしその出発点は、自己を目に見える形で表現するために人間存在の奥底から必然的に生じてくる精神の自律的活動である。ほんらい僅か一度しか使われていないとはいえ、フンボルトの言語論における基本的術語としてあまりにも有名な「エネルゲイア」の概念は、言語表現に対する人間のこのような精神的衝動を意味しているのである。(p. 65)

フンボルトがここで言語をエルゴンとエネルゲイアの二つの面に分けていることは、ゲーテが「形態学序説」において有機体を「でき上がった形」(Gestalt)ではなく「形成されつつあるもの」(Bildung)という見地から考察しようとしていることに対応している。(p. 66)

ゲーテが自然をけつきよく「能産的自然」(natura naturans)と「所産的自然」(natura naturata)に分けて考察しているように、フンボルトも言語を、それを生み出す精神的活動(エネルゲイア)および情神的活動によって生み出された個々の言語(エルゴン)の二つの面から把握している。そしてゲーテと同様、フンボルトも前者に対しては発生論的な見方、後者に対してはアナロジーの方法を適用している。(p. 66)

木村(1980)が「フンボルトの言語研究はどちらかといえば精神の現象学であり、それは後述するように最終的には内的言語形式としての『原型』の解明をめざしている」と言っていることがフンボルトの言語思想を明確にする助けになりそうである。フンボルトが考えていたのは言語を創造する何か根源的な有機体のようなものと筆者は考えているが、木村はそれを「原型」と表現している。

フンボルトに対するゲーテの影響に関しては、木村(1976)も参考になる。

- 8 チョムスキーはHumboldt(1836)からドイツ語のまま引用している。筆者はドイツ語は得意ではないので、日本語への翻訳は同志社大学文学部哲学科教授の田端信廣氏にご厚意でやっていただいた。氏のご厚意に感謝する。
- 9 チョムスキーの引用は、Humboldt(1836)からである。引用箇所は、括弧内に節番号とページが示してある。
- 10 引用文の3行目の*Cartesian Linguistics*は原文ではCartesian Linguisticsである。下線が重ならないようにイタリックに変更した。
- 11 かつてNHKで放映された番組の中で、ある講演会で、「言語学の研究は世界分析に役立ちますか。」という質問に対して、チョムスキーが「全く無関係。」と答え、さらに、「実際には邪魔なんだよ。時間を食うからね。」と続けて発言している場面があった。
- 12 『広辞苑』(第六版、DVD-ROM版)はEnlightenment(啓蒙思想)を次のように説明している。

ヨーロッパ思想上、17世紀末葉に起こり18世紀後半に至って全盛に達した旧弊打破の革新的な思想。人間的・自然的理性(悟性)を尊重し、宗教的権威に

反対して人間的・合理的思惟の自律を唱え、正しい立法と教育を通じて人間生活の進歩・改善、幸福の増進を行うことが可能であると信じ、宗教・政治・社会・教育・経済・法律の各方面にわたって旧慣を改め新秩序を建設しようとした。オランダ・イギリスに興り、フランス・ドイツに及び、フランス革命を思想的に準備する役割を果たした。代表者にイギリスのロック・ヒューム、フランスのモンテスキュー・ヴォルテールおよび百科全書派、ドイツのウォルフ・レッティング・カントなど。

参考文献

- Chomsky, N. (1964). *Current issues in linguistic theory*. The Hague: Mouton.
- Chomsky, N. (1965). *Aspects of the theory of syntax*. Cambridge, Mass.: The MIT Press.
- Chomsky, N. (1966). *Cartesian linguistics: A chapter in the history of rationalist thought*. New York: Harper & Row. 【邦訳: Chomsky, N. (1976). 『デカルト派言語学—合理主義思想の歴史の一章』. 川本茂雄(訳). 東京: みすず書房.】
- Chomsky, N. (1968). *Language and mind*. New York: Harcourt, Brace & World, Inc.
- Chomsky, N. (1980). *Rules and representations*. New York: Columbia University Press.
- Chomsky, N. (1987). Language and freedom. In J. Peck (Ed.), *The Chomsky reader* (pp. 139-155). New York: Pantheon Books.
- Chomsky, N. (1988). Language and mind: Challenges and prospects. (Lecture given at the 1988 Kyoto Prize). Retrieved from http://www.inamori-f.or.jp/laureates/k04_b_avram/img/let_e.pdf.
- Chomsky, N. (1991). Linguistics and cognitive science: Problems and mysteries. In A. Kasher (Ed.), *The Chomskyan turn* (pp. 26-53). Cambridge, Mass.: Basil Blackwell.
- Chomsky, N. (2006). *Language and mind*. Third edition. Cambridge: Cambridge University Press.
- Chomsky, N. (2015). 『我々はどのような生き物なのか—ソフィア・レクチャーズ』. 福井直樹・辻子美保子(編訳). 東京: 岩波書店.
- Coseriu, E. (1970). Semantik, innere sprachform und tiefenstruktur. *Folia Linguistica*, 4, 53-63.
- 福本喜之助. (1982). 『フンボルトの言語思想とその後世への影響』. 大阪: 関西大学出版部.
- Hamans, C., & Seuren, P. A. M. (2010). Chomsky in search of a pedigree. In A. D. Kibbee (Ed.), *Chomskyan (r)evolutions* (pp. 377-394). Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.

- Humboldt, W. v. (1836). *Über die Verschiedenheit des menschlichen Sprachbaues und ihren Einfluß auf die geistige Entwicklung des Menschengeschlechts*. Edited by J. K. Buschmann. 【邦訳: Humboldt, W. v. (1984). 『言語と精神—カヴィ語研究序説』. 亀山健吉(訳). 東京: 法政大学出版局.; 英語訳: Humboldt, W. v. (1999). *On language: On the diversity of human language construction and its influence on the mental development of the human species*. Edited by M. Losonsky. Translated by P. Heath. Cambridge: Cambridge University Press.】
- Humboldt, W. v. (1854). *Ideen zu einem Versuch die Grenzen der Wirksamkeit des Staats zu bestimmen*. 【英語訳: Humboldt, W. v. (1993). *The limits of state action*. Edited by J. W. Burrow. Indianapolis: Liberty Fund.】
- Izui, H. (1968). N. Chomsky: Topics in the theory of generative grammar. *Gengokenkyu*, 52, 99-103.
- 亀山健吉. (1978). 『フンボルト—文人・政治家・言語学者』. 東京: 中央公論社.
- 亀山健吉. (2000). 『言葉と世界—ヴィルヘルム・フォン・フンボルト研究』. 東京: 法政大学出版局.
- 木村直司. (1976). ゲーテとフンボルト—自然と言語における比較の原理—. 『月刊言語』, 5 (10), 70-78.
- 木村直司. (1980). ヴィルヘルム・フォン・フンボルトとゲーテ—自然と言語の生態学—. 『モルフォロギア: ゲーテと自然科学』, Vol. 1980 (2), 63-73.
- Manchester, M. L. (1985). *The philosophical foundations of Humboldt's linguistic doctrines*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Markova, I. (1983). The origin of the social psychology of language in German expressivism. *British Journal of Social Psychology*, 22, 315-325.
- 中井悟. (1999). 『言語学は自然科学か』. 京都: 昭和堂.
- 中井悟. (2008). 『言語の生得性とモジュール性』. 京都: 昭和堂.
- 中井悟. (2015). recursionをめぐる. 『同志社大学英語英文学研究』, 第95号, 125-179.
- Rai, M. (2005). Market values and libertarian socialist values. In J. McGilvray (Ed.), *The Cambridge companion to Chomsky* (pp. 225-239). Cambridge: Cambridge University Press.
- Trabant, J. (1986). *Apelotes oder der sinn der sprache: Wilhelm von Humboldts sprach-bild*. Munchen: Wilhelm Fink Verlag. 【邦訳: Trabant, J. (2001). 『フンボルトの言語思想』. 村井則夫(訳). 東京: 平凡社.】
- Wilson, J. (2005). The individual, the state, and the corporation. In J. McGilvray (Ed.), *The Cambridge companion to Chomsky* (pp. 240-259). Cambridge: Cambridge University Press. 『広辞苑』(第六版, DVD-ROM版). 東京: 岩波書店.

Synopsis

Noam Chomsky and Wilhelm von Humboldt

Satoru Nakai

In the 1960s Chomsky often referred to Wilhelm von Humboldt besides Descartes and argued that his generative grammar originated from Humboldt. But he was criticized for misunderstanding Humboldt's conception of the form of language. Actually, Chomsky did not misunderstand. The cause of this "misunderstanding" is the vagueness of Humboldt's definition of the form of language. Chomsky knows that Humboldt's ideas are vague and he interprets Humboldt's ideas in his own way.

By referring to Descartes and Humboldt, Chomsky seems to have succeeded in justifying his generative grammar historically. Of course, it is not clear whether he intended this or not.

Chomsky also refers to Humboldt because he finds that Humboldt had the same political thought as he does. Both Chomsky and Humboldt argue that the individual citizen should be allowed to have the freedom against the state.

We should realize that Chomsky refers to Humboldt because Humboldt had the same linguistic and political thought as he does.